

## 第 112 話<三等重役>の要約と参考資料

## 第 112 話<三等重役>の要約と参考資料

財閥解体によって中島飛行機と関連会社の組織が解散させられたあと、土呂久鉱山の経営権を握ったのは、岩戸鉱山時代の中堅幹部たちでした。社名を中島産業（のちに中島鉱山会社）に変更し、新宿区の間末に建つ小さな社屋で土呂久鉱山の戦後復興が計画されました。

## 第 112 話<三等重役>の要約と参考資料

### 1 1 2 - 1 戦争中の土呂久鉱山

「九州の金属鉱業」（福岡通産局鉱山部編）P8 より

金銀鉱業を主体とする九州の鉱業界は空前の盛況を呈するに至り、昭和 14 年から 15 年にかけては、各鉱種いずれも最高の生産高を記録した。昭和 16 年（1941）12 月、第二次世界大戦への突入とともに経済統制はますます強化され、同年鉱山統制会が発足し、鉱業界の指導統制を図ることとなり、また対外貿易の杜絶によって金の使命も終わったので、昭和 18 年（1943）遂に金鉱業の整備が行われ、翌 19 年には錫鉱業の整備が行なわれ、九州の主要鉱山はこれがためいづれも休止、事業縮小、あるいは他鉱種採掘への転換を余儀なくされ、その設備と労務者は、他の重要鉱山へ転用された。このように目まぐるしい変動の裡に昭和 20 年 8 月 15 日の終戦を迎えたのである。

帝国鉱業開発株式会社（帝国鉱業開発株式会社社史より）P11～P12 より

帝国鉱業開発株式会社は、支那事変初期の昭和 14 年に設立せられ、太平洋戦争の終戦による戦後処理として、25 年に解散のやむなきに至った。その使命の核は、戦時下の緊急要請である重要産物資源の急速開発とその増産に置かれ、特別の会社法に基づくいわゆる半官半民の国策会社であった。（略）

昭和 16 年までの 3 年間の政府の金属鉱業政策は、産金法—日本産業振興株式会社と重要鉱物増産法—帝国鉱業開発株式会社という二本立ての建て前で進められたのであるが、昭和 16 年 12 月、太平洋戦争に突入するや、政府の政策もここに大きく転換し、金増産政策は全面的に後退し、直接軍需用鉱物資源の開発増産政策一本に絞らざるをえなくなった。

小宮高樹さんの話（1977 年 8 月 15 日聴取）

帝国鉱業開発になって（鉱業権取得：昭和 19 年 4 月 20 日）から、錫を掘らなくなった。マレーシア、インドネシアを占領したので錫が入る。鉱業権は帝国鉱業開発にとられたが、地上権は残る。慣例で、地上権は地下 50 メートルまで。それで、浅い所を掘っ

でダンビュライトをだした。中島が黙認の恰好でダンビュライトを掘っていた。

\*ダンビュライトは、 $\text{CaO} \cdot \text{B}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$ 。Bは硼素、Siはケイ酸。

## 川原の考え

鉱業権が帝国鉱業開発なのに、土地所有者（地主）にすぎない中島鉱山が採鉱できた理由は？ 「鉱業法の適用を受ける鉱物は鉱業法に列挙されたものであることを要する」との規定があり、ダンビュライトは法定鉱物に入っていない。「法定鉱物以外の鉱物は、土地の一部分として土地所有権者の処分権内に属する」とされていたからであろう。

## 1 1 2 - 2 戦中・戦後の土呂久鉱山の経営

### 岩戸鉱山の商号変更

岩戸鉱山（株）昭和 11 年 12 月 創立

本社 延岡市櫛津土々呂 3909

東京出張所 東京市麴町区丸ノ内 2 の 16

（\*登記上の本社は土々呂だが、実際は明治生命館内の東京本社が本社）

昭和 17 年 1 月 本社は東京市麴町区丸ノ内 2 の 16 に移転

中島鉱山（株）昭和 18 年 3 月 15 日 商号を岩戸鉱山から中島鉱山に変更

昭和 18 年 4 月 1 日 土呂久鉱山の鉱業権を岩戸→中島に移転

昭和 19 年 9 月 30 日 本社を東京市赤坂区霊南坂町の中島門吉邸に移転  
登記

昭和 19 年 4 月 20 日 土呂久鉱山の鉱業権を中島→帝国鉱業開発に移  
転

中島産業会社 昭和 20 年 10 月 商号を改称

（\*昭和 26 年 8 月 29 日 再び中島鉱山に改称）

昭和 21 年 8 月 会社経理応急措置法で特別経理会社に指定される

昭和 23 年 11 月 30 日 企業再建計画の許可

新旧勘定併合、資本金 320 万円に減資

### 宮崎地方法務局延岡支局保存 閉鎖登記簿謄本より

#### 岩戸鉱山株式会社

登記の日 昭和 11 年 12 月 23 日

本店 延岡市大字櫛津土々呂 3909 番地

目的 1. 鉱業 2. 鉱物の売買 3. 土地採取業 4. 前各号付帯事業

設立 昭和 11 年 12 月 16 日

資本金 1 千万円

取締役 中島門吉、中島喜代一、中島乙未平、中島忠平、金沢正雄  
代表取締役 中島門吉  
監査役 小宮新八

東京法務局新宿出張所保存 閉鎖登記簿謄本より

岩戸鉱山株式会社

昭和 17 年 1 月 22 日 本店を延岡市から東京市麹町区丸ノ内 2 丁目 16 番地に移転  
昭和 18 年 3 月 15 日 商号を中島鉱山株式会社に変更  
昭和 18 年 8 月 1 日 本店を東京市赤坂区霊南坂町 33 番地へ移転  
昭和 20 年 10 月 5 日 商号を中島産業株式会社に変更  
目的を 1. 鉱業 2. 鉱物の売買 3. 土地採取業 4. 漁業及水産物の加工販売 5. 前各号付帯事業に変更  
昭和 22 年 1 月 24 日 中島門吉代表取締役を辞任、中島乙未平就任  
昭和 22 年 3 月 21 日 中島乙未平代表取締役を辞任、中野和雄就任  
昭和 23 年 3 月 3 日 永見龍輔、糸井一、鈴木仙、真部義一取締役就任  
昭和 23 年 5 月 15 日 中野和雄代表取締役辞任、鈴木仙代表取締役就任  
昭和 24 年 1 月 15 日 目的を変更。5. 林業及木工業を加える  
昭和 25 年 11 月 25 日 本店を新宿区左門町 1 番地の 3 に移転  
昭和 26 年 8 月 29 日 商号を中島鉱山株式会社に変更。  
目的を 1. 鉱業 2. 鉱物の売買 3. 土地採取業 4. 林業及木工業 5. 前各号の付帯事業に変更

### 1 1 2 - 3 中島鉱山の戦後の役員

小宮高樹さんの話（1977 年 3 月 5 日聴取）

財閥解体のとき、中島も財閥に指定された。旧役員とその縁故者で実力者（3 等親か 4 等親）追放。そのため中島門吉の娘婿が一時社長として引き継いでいたのに（縁故者ということで退社。その当時の中島鉱山は、戦争中に木浦を鉱種変更（錫以外の鉱石に変えて、錫鉱山として国家管理に置かれ「帝国鉱業開発」に組み込まれることを免れた）して、経営していたが、土々呂の精錬所をどこかへ売却したため、木浦鉱山の生産活動は低迷。東京・大森の中島飛行機の倉庫に海水をくみ上げて、塩を焼いて採るようなことをしていた。こうしたゴタゴタの中で、鈴木が経営者になる。旧社長・重役がいない中で、課長クラス主体の会社運営が始まる。「三等重役」という言葉があるように、これまでの名のある重役は、列車の一等か二等に乗ったが、この連中は三等に乗った。やがて鈴木は昭和 26 年頃、小宮所長ら技術系の人を呼び戻す形で仕事を始めた。

閉鎖登記簿謄本によると

中島鉱山会社の役員は

鈴木仙	昭和 23 年 3 月 3 日～昭和 33 年 10 月 24 日	代表取締役
	昭和 33 年 10 月 24 日～昭和 41 年 12 月 20 日	解散 取締役
永見龍輔	昭和 23 年 3 月 3 日～昭和 33 年 9 月 30 日	取締役
及川浩	昭和 33 年 10 月 24 日～昭和 41 年 9 月 1 日	死亡 代表取締役
糸井一	昭和 23 年 3 月 3 日～昭和 33 年 9 月 30 日	取締役
加勢清志	昭和 33 年 10 月 24 日～昭和 41 年 12 月 20 日	解散 取締役
真部義一	昭和 23 年 3 月 3 日～昭和 31 年 2 月 10 日	取締役
渡辺直蔵	昭和 33 年 10 月 24 日～昭和 39 年 2 月 29 日	辞任 取締役
木立利雄	昭和 25 年 11 月 21 日～昭和 33 年 9 月 30 日	取締役
米村幹	昭和 33 年 10 月 24 日～昭和 39 年 2 月 29 日	監査役
	昭和 39 年 2 月 29 日～昭和 41 年 12 月 20 日	解散 取締役
花木勝義	昭和 25 年 11 月 21 日～昭和 33 年 9 月 30 日	監査役
青野喜三郎	昭和 39 年 2 月 29 日～昭和 40 年 2 月 26 日	辞任 監査役

\*昭和 32 年 5 月当時 土呂久鉱業所長 木立利雄

新木浦鉱業所長 永見龍輔

\*昭和 33 年 10 月～ 土呂久鉱業所長 永見龍輔

新木浦鉱業所長 鈴木仙

#### 1 1 2—4 鈴木仙（たかし）氏

人事興信録上 第 20 版 昭和 34 年 11 月 15 日発行より

鈴木仙 中島鉱山（株）社長 東京都豊島区在籍

明治 43 年 2 月 25 日元海軍少将鈴木富三の五男に生れ、幸次郎の養子となる。

昭和 7 年慶大経済学部卒業、翌年中島商事に入社、同 11 年岩戸鉱山新設と共に  
会計課長を命ぜられ、其後中島産業と改称。同 23 年社長に就任。同 26 年 8 月  
中島鉱山と改称後も引き続き社長となる。

高千穂町役場資料より

岩戸村会議員 昭和 12 年 5 月 15 日～昭和 16 年 5 月 14 日

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P155~156 より

岩戸鉱山の会計課長は鈴木仙というた。鈴木は昭和 7 年に慶応大学の経済学部を卒業、  
明るく年中島商事に入社して、岩戸鉱山設立のとき 26 歳で会計課長になったエリート

社員じゃ。昭和 12 年 5 月、4 年に 1 度の岩戸村会議員の選挙がやっちきた。村内の土呂久、中野内、東岸寺で 5~600 人の従業員をかかえた岩戸鉱山は、村政に発言力を強むるために村会議員を送り出すことにして、鈴木仙を立候補させた。土呂久はそれまでずっと、部落から代表を 1 人、村会へ出しておった。「南」の三蔵さんは明治 40 年に 25 歳で当選して以来、6 期 26 年にわたって議員をつとめた。

昭和 8 年には「樋の口」の助さんが三蔵さんのあとを継いで当選、今回も部落代表として 2 期目に挑戦するところでの。そこは男子だけの普通選挙じゃが、鉱山は男の従業員へ、鈴木へ投票するよう強力に働きかけた。長屋住まいの者だけでなく、土呂久部落から鉱山に出て働く者までみな頼まれた。(略) 票をほどいてみると、鈴木課長は最高点で悠々と当選し、助さんは落選した。部落の結束が乱れち、かなりの票が鈴木に流れたに違いねえ。

後藤貴高千穂町総務課長の聴取書報告書（宮崎法務局調査書作成）より

鈴木仙氏は東京に居住し、中風病にて療養中。鈴木氏を世話している人は、福岡市天神 1 丁目 12-14、鯛生鉱業 KK 坂口三範という人物。

#### 1 1 2 - 5 戦後の鉱業界

金属資源開発調査企画グループ「日本の鉱業政策の歴史と変遷—第 2 次世界大戦後—」より

終戦から昭和 22 年なかばに至るまでの間は、日本の鉱業は未曾有の混乱状態にあった。終戦直後は、鉱業は非常に荒廃状態に置かれていた。軍需生産上重要な鉱山は、戦時中の不合理な増産の強行によって、抜掘り、乱掘等が行われた結果、老朽設備と貧鉱（経済性のない低品位鉱）のみが残された。また、比較的軍需的意義の少なかった金、錫および硫黄の各鉱業は、金鉱業整備に関する方針（昭和 18 年）、錫および硫黄鉱業整備命令（昭和 19 年）によって、休山または廃坑を余儀なくされていた。これに加えて、終戦に続くインフレーションの進行、食糧難、諸生産資材の欠乏、労働賃金の引き上げなど一連の悪条件は、鉱業生産をますます困難にするとともに、その生産原価の高騰を余儀なくさせた。一方、終戦当時国内には大量の鉱山物の在庫が存在し、これらが低廉な鉱産物の一大供給源となって、鉱産物市場を圧迫し、取引の正常化を阻害した。このような市況の沈滞と原鉱石不足は、鉱産物の新規生産を著しく不利なものとし、製品の滞貨は増大する一方であった。さらに、財閥解体の措置、指導者の追放等は、それまで我が国の鉱業が旧財閥系の資本がその中核を形成していたことから鉱業の回復をますます困難にするとともに、過度経済力集中排除法の適用によるいわゆる「金石分離」が行われた結果、自主再建の見通しも容易に立てることができず、鉱業の荒廃に一層の拍車をかけた。

## 1 1 2 - 6 戦後中島鉦山の本社

吉田清次郎「新宿界限」（中島鉦山季刊誌創刊号；昭和 31 年？）より

四谷は本社の所在地である。正しくは新宿区左門長であるが、四谷 3 丁目の交差点に近い裏通りに、本社の堂々（？）たる社屋がある。本社が、大井の海岸から四谷に移ったのが、慥（たし）か昭和 24 年も押しつまった 12 月であるから、あれから 6 年有余になる。いま新木浦に在勤の小川氏などが先頭になり、職員が毎日、寒風に吹きさらされながら、馴れない手つきで、のみや鉦を握ったのは、ついこの間のような気がするが、早いものである。本社の所在地に、都心にも遠く、主要駅からも近くはない、比較的不便の地と見られるこの四谷界限を選んだのは、主として経済的理由に基くものであるが、住んでみれば、自然と愛着が湧き、案外便利なところもあるので、今では去り難いところになっている。

小宮高樹氏の案内（1979 年 5 月 27 日）

広い交差点を信濃町駅の方へ 20m ほど行って左折。狭い路地を入っていくと、左門（さもん）1 番地という一画。右手に「うさぎ湯」という銭湯。その隣の隣が元の中島鉦山本社跡。いま「北上産業株式会社」の看板を出した事務所がある。本社といっても、そんなに仕事は忙しくなかったらしく、木立氏など午後 3 時ごろから一番湯に入って、それから帰っていた、という。戦後社屋のなくなった中島鉦山（26 年 7 月までは中島産業）は、以前中島と関係のあった人から土地を借りて、木造平屋の社屋を建てた。本社は木造平屋で、中に、ワンフロアの事務室、応接室（ともに板張り）と畳の部屋の宿直室、それに炊事場のある簡単なもの。応接室には硫ヒ鉄鉦の大きな塊があった。暗い部屋で、人はなかなか寄りつこうとはしない。風化した砒鉦に汚染された感じがした。小宮さんは浪人時代の 1 年間（昭和 24 年か 25 年のこと）予備校に通ったころ、ここで宿直のアルバイトをした。戦災で焼けた四谷一帯では、慶応病院の建物が目につくくらい。本社から 100m 離れたところに、四谷怪談で知られるお岩稲荷がある。宿直のとき、シンとした焼け跡に、野良猫の鳴き声がすると気味が悪かった。